

## 企業と地域の連携イベントでSDG s キーパーソンを増やそう！

長野県諏訪市 × 太陽工業株式会社

### 取組概要

企業と諏訪市、地域学校とが協力し学びのイベントを開催することで、地域課題解決へのきっかけづくり、また子供たちが地域の魅力も知り未来の地域経済の担い手へ、など持続可能なまちづくりに取り組んだ。SDG s の輪の基に、地域課題を子供たちと連携してアクションへつなげ学びを醸成させる。



SDG s がつないだ学びの場



よみがえれ諏訪湖！ホートとプロキング

### 基本情報

代表地方公共団体	長野県諏訪市
代表民間団体	太陽工業株式会社
他の連携団体等	長野県産業政策課、諏訪商工会議所、諏訪中学校、飯山東小学校、安曇野私立三郷中学校、下諏訪町漕艇協会、一般財団法人フォースマイル、オートララ諏訪
カテゴリ	環境保全対策／教育プログラム・学力向上／地域情報・行政情報発信
事業費	基本的にお金はかかっていません。
めざすSDGsゴール	
事業化までの期間	2020年1月～2022年8月

### 取組内容



地域の小学校、中学校と学習会



諏訪湖カヤック環境活動

この取組で解決した課題	諏訪市、学校、また企業においても少子高齢化、地域の学生が地元企業に就職しない、市民や社員の地域課題に対する意識の低さ、人同士のつながりの希薄化などが慢性的な課題となっていた。 また、近年では、新型コロナウイルスの影響により接触機会を極力減らす傾向があり、イベント（学びの場）が極端に少なくなっていた。
解決に向けた手法	太陽工業と長野県産業政策課と諏訪市が「SDG s 研修会」を実施。地域企業の理解が深まった。太陽工業とオートララ諏訪と諏訪中学校が「SDG s 地域企業研究会」を実施、また太陽工業と飯山東小学校、安曇野私立三郷中学校が「地域先進製造企業ものづくり体験会」を実施。生徒の地域課題の学びとなった。太陽工業が社内ホート部を創設、下諏訪町漕艇協会と連携して国体出場決定、全国から競技者が集まる場でSDG s の取組みをアピールし諏訪湖創生と競技による地域活性化のきっかけづくりを実現。太陽工業と諏訪市環境課とNPOすまいるが「諏訪湖学習プロキング」を実施。自作のSDG s 紙芝居で子供たちに諏訪の文化、諏訪湖の環境問題について説明、プロキング（ゴミ拾い＋ウォーキング＋カヤック）にて参加者の総合学習となった。以上、原体験を通じて地域社会課題を知り学び合うことにより複合的な地域課題解決につながった。

## 取組詳細

事業推進上の各団体の役割分担	太陽工業が企画、運営、講師、活動に参画。長野県産業政策課と諏訪市商工課、諏訪市環境課、諏訪商工会議所は企画、周知連絡。オートプランス諏訪は講師、段取り。諏訪中学校、飯山東小学校、安曇野私立三郷中学校は企画、運営、当日の段取り。下諏訪町漕艇協会は太陽工業ボートのサポート、備品の貸し出しや選手運搬。フォースマイルがこどもの食事づくり（子ども食堂）実施。
地域関係者との連携方法	諏訪圏域の産官学民、すべての人が互いにアクセスできるようにあらゆるイベント（学びの場）を開催して巻き込んだ。企画を投げかけて全体計画を立案、運営、参画し必要なら単独で乗り込んで交渉した。目的達成のため、企業と諏訪市、地域学校とが協力し学びのイベントを開催することで、地域課題解決へのきっかけづくり、また子供たちが地域の魅力も知り未来の地域経済の担い手へ、持続可能なまちづくりにつながる。
資金調達方法	「資金調達なし」
資金調達方法の補足	強いてあげるなら、子ども食堂の食材などがそれぞれ寄付にてまかった。
事業推進上の課題・工夫	当時はまだSDGsが認知はされているものの、どう活動していいが見えていない自治体、学校、企業がほとんどであったため、関係者へ必要に応じて何度も説明、説得を粘り強く行った。発信にも力を入れた。活動をSDGsレポートでまとめ「諏訪圏工業メッセ」で来場者へ配布した。また新聞やTVメディアにも積極的に情報を出して記事にもらうように依頼した。また製造業界誌にてSDGs記事を執筆などもした。社内においても社員の理解を広げるために独自の「社内認定制度」を制定した。これは研修を経て、資格認定試験を受け合格した社員に認定書とバッジを進呈し「SDGsキーパーソン」として社内認定するものだ。まずは小規模な社内研修会を実施した。定時時間後に有志で参加者を募り各工場で小規模、短時間で実施した。求めがあれば直接その職場へ出向き、その場でたとえ参加者1人でも行った。まさにゼロからのスタートで時間と手間はかかったが、この活動により社員から大きな反響があり理解も深まったと言える。結果として多くの社員が試験を受け、SDGsキーパーソンとして認定された。今、その社員が各イベントで主体的に活動している。

## 担当者のコメント

私はSDGsを「学びのハブ」と考えている。今後、我々一人ひとりが持続可能な社会の担い手であり、リーダーとなる必要がある。それにはやはり教育が重要であり、従来の一方通行型の研修で得られるものではない。これはESD（Education for Sustainable Development）ともつながりを見せる。SDGsなどの社会的課題を自分との関係において考え、多様な見方や考え方があることを理解し、答えが定まっていない問題を多面的、多角的視点から考え続ける姿勢を育てる。SDGsの学習で目指すべきものは現実的な対処策だけではなく、「問題を自分事とし、解決に主体的に寄与しようとする意欲や態度」である。これが社員の人間力を高め地域文化の醸成につながる。変化の激しい時代、答えのない時代、私たちが働く目的や将来のビジョンを共有し、個々に地域課題を「自分事」としてとらえ、自分で考えて問題を発見し瞬時に行動を改善することが必要だ。SDGsへの取組みは我々一人ひとりが持続可能な社会の担い手として育てること、すなわち共創型リーダーの育成に取組んでいると感じている。



担当者写真と独自の社内認定制度

## 優良事例応募項目

取組のポイント（3つの視点）	<p>①地方創生SDGsの視点 以下の内容を参考にして地方創生SDGsの視点について、ご記載ください。 ・イベントを通じ、参画した全ての人の「学びの場」を得る。持続可能な社会づくりの担い手を育む教育につながる⇒ESD ・子供たちへの教育は地域経済の担い手を育てることと同義であり、それは循環型社会への一番の貢献である。 ・工場見学、SDGs学習会などの原体験を通して地域課題、環境問題を知り学び合う⇒SDG4達成</p> <p>②ステークホルダーとの連携 ・地方公共団体（諏訪市、長野県）、学校、NPO、地域住民、そして企業と参画したイベントであった。その活動を地域新聞社、TV放送局が取り上げ大きな反響を生んだ。 ・SDGsでみんなの「想い」が一つになり、お互いの強みが混ざり合い価値が生まれた。⇒SDG17達成</p> <p>③モデル性・波及性 ・弊社の活動により地域企業のSDGsへの新しい取組み事例として注目された。企業からの相談や講師依頼が相次ぎ、SNS等フォローア数はのべ1万人を超える。他団体のモデル（特にSDGs推進企業）にとってはモデルケースになった。 ・製造業の企業×地域NPO＝子ども食堂 このコラボは新規性があり、地域へのインパクト大であった。多くの問い合わせがあり、今後多岐に渡る「新しい動き」への期待が持てる</p>
----------------	--